

ヘーゲル辯證法論過圖式

小笠原秀實

一、辯證の課題

辯證法の起源は希臘哲學に見出され、それには多くの形態が擧げられる。單一のものではない。たとえばツエーノンのもの、ヘーラクレイトスのもの、又ソークラテースのもの、プラトーンのものなどさまざまである。辯證法の語義は「對話」から引き出されたものであり、對話に依り事理が明白になることを意味している。

近代的な形態の一つはヘーゲル辯證法である。それは今日行われてゐるすべての辯證法——觀念論的と唯物論的——の原型である。この原型は人間悟性の根據から批判され、その含む論過が明白に指摘されねばならぬ。それは辯證法そのものは全く悟性の働きだからである。

科學的論争に於て、文化系統の組織に於て、又實踐的な諸原則、諸政策に於て、更に又國際的外交の諸折衝に於て、辯證的方法是主要な意味を持つ。これらの領域に於ける諸研究、諸論義は正確なる科學的推論に依つて行進すべきであり、詭辯的錯誤性又は實行的デマゴギズムに依つて運用されてはならぬ。

この目的に向つてヘーゲル辯證法の骨目とも見なされる「有」「無」「成」の三概念の性質並びにそれらの辯證性的構造を分析し解明することが方法的である。このために「哲學全書」第八十六―八節 (Encyclopadie der philosophisc-

Jen Wissenschaften) を通讀したのである。

二、有に ついて

「純有は端初をなす。何故ならばそれは純粹思惟であると共に無限定な單純な直接なものであるから。然し第一の端初は如何なる間接なものでもなく、且つより以上限定されたものであり得ないからである。(1)

有は私 \parallel 私、又は絶對無差別、又は大同などとして限定されることが出来る、等々。(2)

若し私 \parallel 私、又は知的直觀さえも實際最初のものとして考えられるならば、この純粹直觀性に於て、それは有の外のものでもない。同時に逆に純有は、もはや抽象的なものではなく、自らの中に間接を含んでいる有として、純粹思惟であり、又直觀である。(3)

有が絶對的者の客語として明言されるならば、これが絶對者の第一の定義である。即ち絶對者は有である。(4)

これは思惟に於て純粹な最初の、最も抽象的な、そして最も貧しい定義である。(5)

それはエレア學派の定義であるが、同時に又神はあらゆる實在の總額であると云う能く知られた定義である。(6)

それは各の實在中に存する制限から抽象されねばならぬ。それ故に神は、あらゆる實在中に於ける實在的者であり、最大度に於ける實在的者である。(7)

實在はすでに反省を含むが故に、これはヤコビがスピノーザの神はあらゆる存在中にある有の原理であると云つてゐることに於て直接に明示されている。(8)

以上が有に關するヘーゲルの説明である。このことがこのまゝで認容されるものか、何うにも認容されない要素を持つかが検査されねばならぬ。

1) の條下に於て、有は「純粹思惟」「直接性」である。然し(2)の條下に於ては、有は「私 \parallel 私」であり、又「絶對無

差別」であり、更に又「大同性」である。そも、直接性は「私自體」たるべきであり、二つの私に分れ得ない一つの私であり、従つて「私は私である」又「私||私」ではないはずである。「私は私である」は主語の私と客語の私とに分れている二つのものを結びつける判断である。分裂を許さない私自體は無限な私である。又別の例に依れば「Aそのものは無限のAであり、純粹直接であるが、「AはAなり」は反省に進んで二つに分れたAを結合する判断であり、論理學としては自同律と呼ばれているものである。

こゝで見出されるのは、ヘーゲル思辨に於ては「直接」ということと、「自同」ということとが混同されていることである。自同は二つの概念の關係づけであり、直接性は分裂なき無限定な一つのものである。これをもし押し切り、「ヘーゲル辯證法まかり通る」と云えばそれまでである。これが第一の根本的論過である。

(3)の條下に於ては「自らの中に間接を含んでいる有として」有が別のものとして取扱われている。少くとも有は直接と間接との間を動搖し、一定の定立を持たない。有に二つの意味が交叉し、用語二重使用の詭辯を含んでいる。第二の論過である。

(4)の條下に於て、有は形而上學的本體となつてゐる。それは第三の變化であり、浮動であり、従つて錯誤である。何故ならば最も直接にしそ單純なるものは、萬象を支持するに足る實體論上の實體とはなり得ないからである。第三の論過である。

(5)の條下に於て、有は最も貧弱なものとなつてゐる。これは第四の變化あり、變化の理由は明示されていない。

あらゆる概念は外延と内包とを持つ。抽象に依つて有は最大の外延に達し、すべてのものを含むことが出来るが、これに依つて限定的な内包を失う。然し如何に抽象されようとも有が肯定である限り、あるものであつて無ではない。最も貧弱であるにしても依然として有たるべきである。辯證法は自恣的に立場を變えるべき筈のものを、無に變えてしま

い、又肯定を勝手に否定に移してしまふ。こゝでは外延の立場から内包の立場に潜入し、奇術的に有を無にする動機を留意している。甚だ機微に屬するが詭辯性はどこまでも詭辯性である。第四の論過である。

(6)に於て有はエレア學派の定義となつてゐる。エレア學派の有は最貧困のものではない。パルメニデースに依れば、有は不壞、不変、不可分割のものであり、あらゆる實在の基礎たるものである。これが第五の論過である。

(7)に於て神(有)は至上實在である。(5)に於て最貧困であつた有が、こゝでは至上的實在になつてゐる。第六の論過である。

(5)に於て有はスピノーザの神となつてゐる。スピノーザの神は自己原因のものであり、他の何ものにも依らず自存し、實に存在力を具備する自己存在體であり、萬象の支持者である。すべて哲學的に本體として擁立されるものは最も基本的にして不増不減の不動體たる性質を何かの形に於て備えて居り、スピノーザの實體はかゝる性質を最も明確に把持してゐるのである。最貧困にして最も動搖性を持つ筈のものではない。これが第七の論過である。

有に關するヘーゲルの八命題にわたり七つの論過を持つ。かゝるものがヘーゲル思辯に於ける有の概念であり、又かゝる推論の方式を以つて進行するのが辨證性の規格である。詭辯とはかゝる推論形式の名であり、この種のものを外にして適用所を見出すのは困難な言葉である。

三、無についで

無の考は次のように説明されてゐる。

「そこでこの純有は純粹抽象であり、従つて絶対否定的のものであり、この否定的のものは、同じように直接な姿に於て無である。(9)

これから絶対者は無であるという絶対者の第二の定義が生ずる。實際この定義は、物自體は無限定なものであり、

明らかに無形式にして、従つて無内容であるといわれる中に含まれているのである。何故ならば神はかかるものとして全く同じような否定であるといわれているからである。佛教徒が萬有の目的並びに究竟目標であると共に一切の原理であるとしている無は、同じ抽象である。(10)

(9)の條下に於ては抽象ということと否定ということが混同されている。抽象というのは感覺的な特殊性質を抽きさることであるが、然し普遍的にして基礎的なものを常に肯定している。否定はたゞ一義的に否定するのみである。それは特殊、普遍の差別なしに單に否定し終るのであり、肯定の要素は含まれていない。このことの混同が第八の論過である。

(10)に於て物自體は無と呼ばれている。それは無限定にして無内容だからである。然し物自體は主觀的にか又客觀的にか、とにかく有るものである。無ではない。これが第九の論過である。

又佛教徒の無は單なる否定ではない。遮情の爲の否定である。妄念、錯誤、混亂、苦痛の根源になるものを否定し遮斷し、正道に合致し涅槃の本質に到達し、かくして最も神聖なる淨福に達する手段である。無が「目的」でも、「究竟目標」でもない。これが第十の論過である。

精密に考究するに従つて到るところにこの種の過誤が見出される。「辯證法まかり通る」として簡単に服従することは出来ない。

四、有の諸相の系統的綜括

以上の考察に依り我々は有に區別されねばならぬ三つの性質のあることを見出す。(a)外延、(b)反省的内包—限定的内包、(c)純粹内包—自明の内包力、圖示するならば、

外延「萬有を含む」—— (a)

有
 内包「反省的」限定的内容「(b)

純粹的「自明の内包力」(c)

エレア學派の有並びにスピノーザの實體は(c)の性質であり、それは自明と確實不動とを本質としている。かかる性質なくば有は實體論的本體たることは出来ない。ヘーゲル辯證法はこれら三性質を混同し、曖昧の中に一つより他のものへと浮動し移動する。移動の動機となるものは概念中に含まれている内部矛盾である。然し矛盾は實在中にはあり得ない。實在界には事實の相關係はあるが、矛盾のあらう筈はない。内部矛盾なるものは同一體を別の立場から見ることによつて誘導されるものであり、又同一概念、同一用語を二重に使用することに依つてひき出される過誤である。それらは推理の錯誤ではあるが矛盾ではない。

五、成についで

「成」に関する説明

「無はこの直接にして自己同一なるものとして、逆に、有があると同じものである。有と無の眞理は、兩者の統一である。この統一が成である。」(11)

無は反省思辯の結果である。従つてそれは「直接にして自同」のものではない。有は何ものかを加えて無に成る、有プラス或るもの、それが無であるとも云われて居り、そうした思辯的事實も認め得られる。無は有と同じではない。有と無、肯定と否定とが同一主題に関し、同一立場に於て、同時に共存するものではない。時をかえるか、立場をかえねば成立し得ない。一つ考を肯定しながら、肯定しているものをそのまま否定しているということはない。肯定の半面に否定があるのは立場をかえることであり、又判断作用の概念分析の場合に云われることである。 Omnis determinat-

io est negatio (すべての限定は否定なり) は限定作用の概念分析であり、限定しているそのことを否定しているのではない。かくて成は有と無とを統一しているのではない。何故ならば實在するものに矛盾はないからである。成は他の方法、他の事實を基礎として説明されねばならぬ。人は東に進むと同時に西には進み得ないからである。正しい論理學は歸納、演繹の二法に依止すべきであり、矛盾の一致、矛盾の實在を要求する辯證法的論理であつてはならぬ。

實在する矛盾として擧げられているすべてのものは、單純な相違に過ぎないか、又は具體的な事實を不當に抽象して、その結果を矛盾と呼んでいるに過ぎない。矛盾が實在するのではなく抽象の方法が正しくないので矛盾する要素になつたのである。たとえば運動は一主體が同時に一点にあつて無いこととして説明され、これが矛盾の存在であると叫ばれている。然しある、無いは共に靜止概念である。運動という具象的事實を全く別な靜止狀態なる有無に分解したのである。運動が矛盾存在ではなく、矛盾概念に分析したゞけのものである。分析の不當から、やがて綜合の場合、矛盾の一致という説明を採用しているのである。實在に矛盾はない。不當分析、不當抽象が誤謬であり、これを糊塗しようとするものが矛盾の一致なるパラドックスである。合理の領域には、たとひ解らぬものはあるにしても、奇蹟と迷信とはあり得ない。

成なる概念も亦、具象的な「成る」という事實を、抽象に依つて有と無とに分析したのである。その爲綜合にあつて矛盾の一致というように表現されねばならないのである。有と無とは一致し得ない。抽象的な有無の概念が如何にして構成されるかの根元を糺明しなければならぬ。すべて抽象の際切り捨てた主要な要素を綜合の際取り入れねばならぬ、不合理性が矛盾の一致觀となる。社會機構の諸矛盾と見られているものも、精密に検査するならば、兩立しない矛盾が實在しているのではなく、二者の相違ということに歸着するのである。矛盾が實在の根本形態であるということとは全くないのである。

六、結語、組織實在論的進

ヘーゲル思辨に於ける有無成の三概念に關し、我々は以上の論過を見た。辯證法の進行にあつてこの論過は常に繰りかえされ、且つ激化されている。唯物辯證法も亦この論過から自由ではない。それはヘーゲルに於ける、「合理的鎖環」を採用すると認めているが、ヘーゲルに於ては不合理的鎖環は連續激化するが、合理的鎖環なるものは見出し難いからである。概ねそれらの不合理性は媒語又は媒介思想の二重使用に依り、矛盾命題を構成し行くのである。修正されねばならぬ論過の連續である。

上來の歸結として我々はヘーゲル辯證法の根本に於ける基本的論過を擧げることが出来る。それは(a)相關性と、(b)辯證法(矛盾の一致)との混同である。(a)は許される、然し(b)は許されない。

(a)相關性は二つ以上の要素(又は因果)の相互關係である。これは現存するのであり、その分析と綜合とは可能である。(b)辯證法は矛盾の存在とその一致とを主張する。それは相關的な觀方と類似しているが、性質に於て全く別である。矛盾は二者の相互關係ではなく、全く兩立し得ない關係である。従つて存在する筈はない。このことの混同が基本的論過となつている。

實踐領域に於てこれらの論過は專制政體の原理たるばかりではなく、多くの独占組織體の哲學となる。例えば我々はヘーゲルの專制國家論を擧げることが出来る。それは實證的な事實から離れ、詭辨||阿片的欺瞞に依つて基本人權の基礎たる自由と平等とを灣曲させる。自由と平等とは人間の自覺實感を根據とする歸納||演繹的推理に依つて建設せられ且つ増進させられる。

近代的思考の健實なる方途としては、デカート、スピノーザの線と、ベーコン、ロツクの線とが綜合され、輔導されねばならぬ。この進路を私は組織的實在論と呼ぶこととしてゐる。我々の構成能力に依り、我々は客觀的實在を嚴密に

構成し、各種の檢證に依つて眞理を樹立し把握する。かくして構成された客觀的實在性を根據とし、個人並びに全協同體の健全なる幸福組織を建設すべきである。これらのこと、専ら精密なる推理と研究とに依り、すべての不合理的、詭辨的臆斷を離れ、實證されたる眞理に依止しなければならぬ。この努力に依つて我々は理論的にも實踐的にも、あらゆるデマゴギズムから解放される。「絕對矛盾の自己同一的辨證法まかり通る」という強剛な態度は錯誤時代、迷信時代では許されるにしても、實證的眞理そのものはどこまでも拒否するのである。